

## [006] 総合文化学論輯表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1955360>

---

出版情報：総合文化学論輯. 6, 2017-05-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies  
バージョン：  
権利関係：

## 荒木見悟博士追悼特集 (The Memory of Dr. Kengo Araki)

九州大学名誉教授、荒木見悟博士が、平成 29 年(2017)3 月 22 日に逝去されました。

氏は当総合文化学会の前身の比較思想学会福岡支部の全国組織、比較思想学会の呼びかけ人として学会創設に尽力され、比較思想学会福岡支部や総合文化学会の創設運営に多大なご協力を賜りました。ここに、総合文化学会としても謹んで弔意を表させて頂き、氏の 99 歳 10 か月の人生の記録の一端を掲載させていただきます

まず氏の略歴と業績ですが、以下の略歴と業績表は平成 21 年 11 月に氏が西日本文化賞を受賞された際、ご自分で作成されたものです。掲載誌『比較思想論輯 第 18 号』より転載致します。

### 略歴

略歴	
大正六年五月二十一日	誕生 広島県佐伯郡廿日市町
昭和十七年九月	九州帝国大学法文学部卒業
昭和十七年十月	九州帝国大学法文学部副手
昭和十八年四月	広島県立竹原高等女学校教諭
昭和十九年十一月	長崎師範学校助教授
昭和二十四年十一月	福岡学芸大学福岡第二師範学校助教授
昭和二十六年三月	福岡学芸大学助教授
昭和三十四年七月十三日	文学博士 (第四八八〇号、論文「朱子の哲学」)
昭和三十七年四月	九州大学文学部助教授
昭和四十三年七月	九州大学文学部教授
昭和四十四年四月	九州大学評議員
昭和四十六年十一月	九州大学文学部長
昭和五十六年四月	一日付を以て定年退職 九州大学名誉教授
昭和五十六年四月	皇學館大學教授 (昭和五十七年三月まで)
昭和五十七年四月	北九州大学教授 (昭和六十二年三月まで)
昭和六十二年四月	久留米大学教授
昭和六十三年四月	久留米大学客員教授
平成二年四月二十九日	勲二等瑞宝章を授与さる
平成二十一年十一月三日	西日本文化賞受賞

比較思想論輯 一比較思想学会福岡支部一 第 18 号  
(ISSN 1883-2539) 2010.3.31

## 業績表

著書及び編著	発行年月	発行所
1. 亀井南冥と役藍泉 (徳山市立図書館叢書第 10 集)	昭和 38 (1963) 年 1 月	徳山市立図書館
2. 仏教と儒教—中国思想を形成するもの	昭和 38 (1963) 年 4 月	平楽寺書店
3. 大慧書 (禅の語録第 17 卷)	昭和 44 (1969) 年 5 月	筑摩書房
4. 竹窓随筆	昭和 44 (1969) 年 10 月	明德出版社
5. 貝原益軒・室鳩巢 (井上忠氏と共著、日本思想体系 34)	昭和 45 (1970) 年 11 月	岩波書店
6. 明代思想研究	昭和 47 (1972) 年 12 月	創文社
7. 朱子・王陽明 (溝口雄三氏と共著、世界の名著)	昭和 49 (1974) 年 6 月	中央公論社
8. 大応 (日本の禅語録第 3 卷)	昭和 53 (1978) 年 3 月	講談社
9. 亀井南冥昭陽全集 (井上忠氏と共編) 全 8 卷	昭和 53 (1978) 年 4 月 ～55 (1980) 年 10 月	同刊行会
10. 仏教と陽明学 (レグルス文庫)	昭和 54 (1979) 年 8 月	第三文明社
11. 明末宗教思想研究—管東溟の生涯とその思想	昭和 54 (1979) 年 10 月	創文社
12. 楠本端山・碩水全集全 1 卷 (岡田武彦氏等と共編)	昭和 55 (1980) 年 8 月	葦書房
13. 輔教編 (禅の語録第 14 卷)	昭和 56 (1981) 年 5 月	筑摩書房
14. 吉村秋陽・東沢瀉 (荒木龍太郎氏と共著)	昭和 57 (1982) 年 6 月	明德出版社
15. 大応国師語録 (禅の古典 2)	昭和 57 (1982) 年 12 月	講談社
16. 陽明学の開展と仏教	昭和 59 (1984) 年 7 月	研文出版
17. 雲棲株宏の研究	昭和 60 (1985) 年 7 月	大蔵出版
18. 呻吟語	昭和 61 (1986) 年 5 月	講談社
19. 楞嚴経 (仏教経典撰 14)	昭和 61 (1986) 年 7 月	筑摩書房
20. 亀井南冥・亀井昭陽 (日本の思想家 27)	昭和 63 (1988) 年 10 月	明德出版社
21. 中国思想史の諸相	平成 1 (1989) 年 5 月	中国書店
22. 李二曲 (シリーズ陽明学 18)	平成 1 (1989) 年 9 月	明德出版社
23. 呻吟語 (講談社学術文庫)	平成 3 (1991) 年 3 月	講談社
24. 陽明学の位相	平成 4 (1992) 年 3 月	研文出版
25. 明清思想論考	平成 4 (1992) 年 12 月	研文出版
26. 新版 仏教と儒教	平成 5 (1993) 年 11 月	研文出版
27. 大応 (禅入門 3)	平成 6 (1994) 年 11 月	講談社
28. 中国心学の鼓動と仏教	平成 7 (1995) 年 9 月	中国書店
29. 新版 明代思想史 (秋吉九紀夫氏と共訳)	平成 8 (1996) 年 6 月	北九州中国書店
30. 草場船山日記 (監修)	平成 9 (1997) 年 10 月	文献出版
31. 島田藍泉伝	平成 12 (2000) 年 2 月	ぺりかん社
32. 憂国烈火禅 禅僧覚浪道盛のたたかい	平成 12 (2000) 年 7 月	研文出版
33. 袁中郎『珊瑚林』訳注 (監修)	平成 13 (2001) 年 3 月	ぺりかん社
34. 竹窓随筆 (監修)	平成 19 (2007) 年 6 月	中国書店
35. 陽明学と仏教心学	平成 20 (2008) 年 9 月	研文出版

## アルバム

(氏が大切に保管されていたもののうち、比較的古いものを中心に掲載させていただきます。)



4歳・大正10年9月



小学生時代



青春時代

龍谷大学学生時代

(氏がご自身でアルバムに貼付され、後に、この時代のものだけを切り取って  
保管されていたもの。)



現象の彼方へ  
(143 龍丸ニ?)



144



洛北 叡光院  
(145 延慶の頃)



龍丸 批察  
(146 延慶の頃)



損澤 野原



洛北 野原

叡岳拾遺



秋田堂前 (11.5)



親道上人御木像 (無量院)



無量院 (12)



門前の小僧



にんげん堂 (常行堂と法華堂)



弁士院



桂公園 (11.10)



百茶石 (11.10) 親土道社を撮影



京都市山本山寺 (11.10)



冬日 (11.10) 八坂橋を三光橋を撮影



水鏡への見景

※以下のキャプションは氏ご自身が写真裏に記されたものです。



昭和 16 年 2 月 18 日(火) 三畏閣に於て文友會送別會を開く

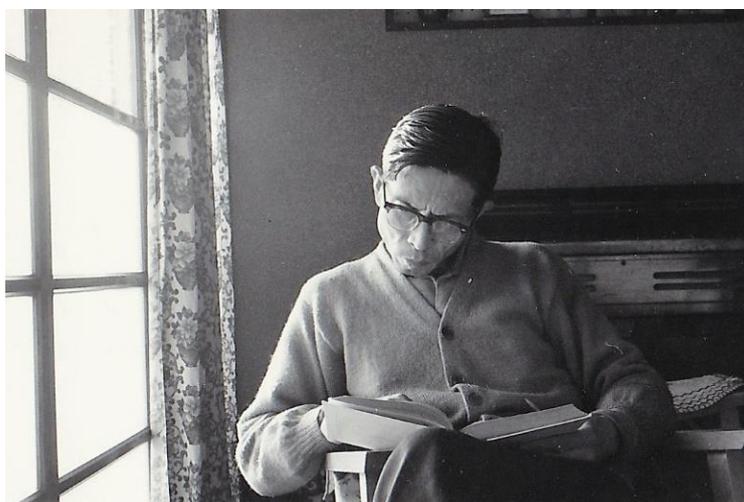


(※ キャプションは次ページ)

(前頁説明) 昭和 17 年 1 月 20 日 (火) 長末勉氏壮行会 於：三畏閣  
前列右より目加田教授・楠本教授・長末勉氏・重松教授・日野助教授 中列 松枝助教  
授・瀬利さくを氏・森・島尾・中江健三氏 後列 小生(見悟)・辻・江島壽雄氏・松本眞  
昌氏・近藤春雄氏



昭和 37 年 5 月九大文学部



1962.12.29



平成 21 年(2009)11 月 西日本文化賞受賞



2017.3.21 逝去前日

## 父、荒木見悟と「繋ぐこと」

荒木 正見

父について思うたびに、父は「繋ぐこと」をいつも意識していたことに気付く。

繋ぐことは三つあった。第一は生命、第二は荒木家、第三は学問。そのいずれもが血の滲むような体験に裏付けられていた。

生命についてはその原点は阿弥陀如来の信仰にあった。旧制中学を出て入学したのは龍谷大学で、僧侶になるつもりだったと聞いた。しかし修行していくうちに一宗派ではなく阿弥陀の教えそのものを普遍的に追求したくなって九州帝国大学に入学する道を選んだと言っていた。

すべて生きとし生けるものを無限に救うという阿弥陀如来の信仰は、長崎で原子爆弾に遭遇し夫婦とも重傷を負い生後五か月の長男知見を死なせてしまったことで、さらに鋭く磨かれていった。

次男正見が幼いころ、人を救うのは医者になることだと思って、父に「お医者さんになりたい。」と言ったところ、喜んでくれると思いきや、怖い顔で「だめ。」と言われた。なぜなら、医学は人間の命を救うかもしれないが多くの他の生き物の命を犠牲にしているからだという。特に父母とも阿弥陀信仰に守られてきた家系なので、もし、医学実験でも他の生き物を殺したら子孫が絶えることになる、滔々と説教された。

たしかに父は道路に落ちていた亀を拾ってきて庭の池で買ったり、縁日の兎を買ってきたり、野良犬を引き取ったりしていた。浄土宗のお寺の娘だった母も、貝を調理するに当たっては二、三匹を残して、自分に海水を汲みに走らせて、せめて僅かだけは自然死を待っていた。熱湯に貝を入れる時にはもちろん「南無阿弥陀仏」と唱えていた。福岡周辺には魚や鳥賊を生きたまま姿作りにする文化があるが、父が最も嫌うところだった。

そして二言目には殺生するものは子孫が絶えると口癖のように言っていた。実は、このことが、次の「繋ぐこと」、すなわち荒木家を繋ぐことに結びつく。

荒木家を繋ぐことで特記すべきは、父は養子として荒木家に入ったということである。

訳あって途絶えそうになった広島県福山の荒木家は父の母親の実家。結婚と同時に父の祖父の養子となったのだが、父は最期まで、生まれ育った広島県廿日市の香川家に戻ることを夢見ていた。2017年3月22日に呼吸が止まる直前まで書いていたエッセー的小説は、自分と思しき主人公が廿日市の香川家に帰る内容だった。

ところがそれにもかかわらず父は荒木家にこだわった。自分の本能的な欲求や懐旧の念を封印してひたすら荒木の人間になろうとした。荒木家は未来永劫継がなければならぬ、と教えてくれたのは自分が高校生のころだった。当時は何のことかよくわからなかったが、その後少しずつ荒木家というものを父が説明してくれて、父が継がねばと言ってい

るものの意味を垣間見ることができるようになってきた。福山の荒木家は「千田の荒木」といって千田村を治めていた。藩主阿部家とも親しく、代々の藩主は幕府老中職を仰せつかって多くの時を江戸で過ごしていたが、福山に戻った折にはしばしば千田村の荒木家を訪れていたという。父はその折に藩主が使用した箸や食器がこれだと、墨書きとともに保存されているものを見せてくれた。

しかし、父が継がねばならないと言ったのはそのような政治的立場ではない。ある日父は短い袴を取り出して、これが文化文政時代の荒木当主が使用していた袴で、この人に嫁に来たのが江戸時代の学者であり篤志家で、廉塾を開いて教育にあたった菅茶山の妹だ。荒木家は代々文化を守る家系なのだと説明してくれた。それだからこそ荒木家は代々守り継がねばならないと話してくれた。

その時、自分は戦国武将に興味を持っていたので、もしかしてうちの荒木は、晩年を文化人として備後で過ごしたあの戦国武将の荒木と関係があるのか、と尋ねたが、父は、そのようなことをいう人もあるが、こんな系図もある。と出してきたのは、桓武天皇からの平氏の系図で末尾にはかの父の祖父の名があった。しかし父は、この系図は最近作られたもので平氏の子孫と言うのも一部の言い伝えでしかない、と曖昧なことを言ったのを覚えている。

このように、血筋というものは曖昧だが、父が言ったのは、血筋としての荒木ではなく文化の担い手としての荒木で、それで自分は清水の舞台から飛び降りる覚悟で荒木家に養子に入ったと、やけに能弁だったことを覚えている。

自分が哲学的場所論なるやや学問的には片隅のところを研究し始めたのはこのような父の意向を暗黙裡に受け止めたことに他ならない。そして、父が本能的な思いに封印してまでこだわった荒木家というものをいまこそもう一度考えてみたい。

この「文化」、というのが、父が繋がなければならないと言っていたもう一つの事柄だ。

最晩年に父がやや認知症気味になって回らぬ舌で、自分が訪ねていくと必ず言われたのは、「今どこに勤めているのか。」ということだった。死の前日、父と最後に交わした言葉もこれだった。これには深い意味がある。父にとって研究者の最も大切な使命は学問を繋ぐべく弟子を作ることだという固い信念があった。「弟子は自分の宝だ。」とよく言っていた。ところが無能な息子の諸事情から、自分は研究者の弟子を作ることができる大学に勤務することはできなかった。チャンスを作ってくださった方々もあったが、私的な理由ですべて断らざるを得なかった。研究者仲間からその情報が入るたびに父は怒ったように「今どこに勤めている。」と分かっていながら尋ねた。裏には学問の伝統も作れずだらしないやつ、という意味を込めながら。

確かに父は学問を継ぐお弟子さんを大切にされた。指導が厳しすぎて閉口されたかもしれないが、「弟子は宝」だと思っていたからに他ならない。そしてもちろん継ぐに値する学問を確立するために他のすべての俗世間の楽しみを犠牲にして毎日死に物狂いで努力をした。母もそれをよく理解して、雑用はすべてこなし、悪筆な父の代筆をし、父に対しては特に人前では敬語を使い、尊敬の念を内外に表現してとかく誤解されがちな研究者としての父の立場を守った。

そして今、父が逝去して次々に弔問に訪れて下さるお弟子さんの立派なお姿を拝見するにつけても、父の学問を繋ぐことは間違いなく成功していることが感じられる。父にとって最も幸せなことを実現してくださっている多くのお弟子さんに心から感謝申し上げたい。